

大城 立裕

華々しき
宴のあとに

日本放送出版協会

華々しき宴のあとに

大城 立裕

大城立裕（おおしろ・たつひろ）

1925(大正14)年 沖縄県中頭郡中城村で生まれる。

1967(昭和42)年 第57回芥川賞を『カクテル・パーティ』で受賞。沖縄初の芥川賞作家となる。

『小説・琉球処分』『現地からの報告・沖縄』
『ばなりぬすま幻想』『恩讐の日本』『風の御
主前』小説・岩崎卓爾伝』『神島』『白い季
節』『まぼろしの祖国』など著書多数。

現 在 沖縄県立沖縄史料編集所長。

検印廃止

華々しき宴のあとに

一一〇〇円

昭和五十四年七月二十日 第一刷

著 者 大 城 立 裕

発 行 者 藤 根 井 和 夫

印 刷 鋳 亭 有 堂

製 本 鋳 石 津 製 本

発 行 所 日 本 放 送 出 版 協 会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

目次

春の海 5

御嶽と民宿 34

嫡子堂々 60

仲村渠マカテ 87

発見 120

美沙子の貢獻 161

へんな乾杯 198

陥穽 238

挫折の夏 277

ようやくの秋 320

華々しき宴のあとに

春の海

とにかく、

「海洋博」

というものが何であるか呑みこむのに、手間がかかった。この伊江島いえじまの、島じゅうの人が、である。

新聞に出はじめて半年ほどのうち、呑みこむ必要はないと思われた。島には役場や学校や農協、漁協などもあるから、新聞をたんねんに読む人がいないではないが、島に縁遠い話は社会面の犯罪記事ぐらいいしか興味がない。海洋博というのは大きなお祭りだとは思っても、どうせ那覇あたりでしか行なわれまい、と誰もが考えた。それが「沖縄北部の本部半島もとがで」と噂が流れはじめたときに、驚いたのである。

「読谷よみたんでやろうという話もあったそうだがね。ぜひとも北部開発に、ということになったそうだ

よ」

と赤嶺貞子に情報をもってきたのは、従兄の照屋孝信である。農協につとめていたのをやめて、島の小さなタクシー会社をやっているが、かたわら村会議員もつとめているから、その筋からの情報であるらしい。

「北部開発って何ね？」

貞子は、茶をつぎながらさく。小さなそば屋をやっているが、そば以外のことに関心をはじめて向けた。

「北部開発は北部開発さ。道をつくったり、港をつくったり」

「なぜ、……それは今でもやっているんでないですか」

「これが開発のうちか。開発といったらお前……」

照屋は、言いかけたものの、あと説明の材料に困って、出まかせを言った。「山原じゅうに高速道路を通して、那覇の勤め人の住宅を山原に分散させることまで、いろいろあるんだぞ」

語尾のところは自信がなく、さすがに声をおとしたが、貞子はそれには気づかず、

「高速道路といったら、テレビで見えたさあ。自動車が、サーラナイ、ブーブー、ぶっとばして行くものでしょう。ハッサ、そうしたら、名護の七曲りもなくなくなるねえ」

「それよそれよ。よい勘であるさあ。七曲りの山を削り、海を埋めたりして、那覇から名護まで三十分、いや一時間はかかるかなあ」

「名護から本部までは？」

「山からトンネルだはずよ」

「渡久地とぐちからこの伊江島いじままでは橋をかけて、伊江島一周線が五分間ねえ」

二人で大笑いしているうちに貞子はなお悪乗りして、

「伊江タツチューまで、車が勢いあまって乗りあげたらよお」

「狂れ物言いして……」

貞子には姑にあたるマツである。卓袱台のむこうがわでテレビを見ていたが、はじめて口をだした。ものしずかだが、口調には自信がこもっている。

伊江タツチューとは、島の中央に立っている山である。岩だらけで、島をまんなかでいきなり突き破って出たというように、突き立っている。山というより太すぎる聳え岩だ。標高一七二メートル。

「タツチューに自動車が登るといってもあるか」

と、マツは言う。

「お祖母おばあよ……」

貞子は、ひとりで可笑しがって、「例えばの話なのに。私でも何を本気で、そんなことまで考えるね？」

「なんで、そんなに跳ねかえっておるか」

「開発だと。海洋博だと」

「はあ、年寄りには何も分らん」

「このおばあよ。私でも分らないんだのに、おばあが分らなくても珍しくもないさあ」

あっさりと言ったものの、海洋博とは何であるか、見当がつかないことは、やはり気になる。

「海洋博覧会といいましたね……」

照屋にきいた。「博覧会って何ですか。万博みたいなものですか」

「そんなものだろう」

照屋も、それ以上のことは分らない。

「海洋って何ですか」

「海さあ」

「海は分っているがよ。海の博覧会って何ですかということさ。海のお祭りというのに北部と関係があるというのは、どういうことか、ときいているんでないですか」

「いまから考えるんだのに、分るか」

「あはあ。政府がまだ発表してないということ？」

「そうさ」

と照屋が答えたのと、そば屋の客が来たのと同時であった。貞子^たが起っていくと、照屋はあやうく脱けられない穴にはまりこみそうになるのを免れた。

「海洋博をやったら、そば屋も儲かりますかね？」

貞子が戻ってきて、関心を深めた。が、照屋はこのあたりで気が脱けている。実は彼は、ちょっ

とだけ威張ってみせたかったのである。モーターボートのことだ。

モーターボートの事業を彼がはじめたのは、一年ほど前のことである。伊江島の海は美しい。夏の爽快なること、この上もない。まもなく日本復帰も実現するというし、観光客もふえるであらう。ということではじめた。ところが、今のところ思わしくない。赤字がつづいている。そこへ海洋博の話だ。海の祭りというのだから、モーターボートの景気があがらぬはずはない。運が向いてきたぞ。——という話を聞かされたのである。

それに、もう一つある。モーターボート基地の近くに東浜御嶽あがりほまたきがあるのだが、そこを管理する祝女あづながマツばあさんで、はじめから機嫌がよくない。神をおそれぬ所行だと、言いかねない風情がある。そのばあさんにも、時勢のおもむきを誇ってやりたい気持ちがあった。

が、これらはこの日の段階であまり成功していない。ま、いいさ、とひきあげることにした。

モーターボート基地は、閑散としている。基地といっても、珊瑚礁岩に簡素な木造の船着き場をくつつけて、モーターボート十隻を常置し、それをトタン葺き五坪の事務所が監視する、というだけのものである。事務所には日ごろ赤嶺英子だけがいる。机はもう一つあるが、照屋孝信はときたましか顔をみせない。春先の潮の香と波の岸をうつ音とだけが、英子を包んでいる。彼女は女性週刊誌を読んで暇をつぶしている。

そこへ田端正巳がやってきた。ずいぶん歩きまわったと見えて、背広の上着をかかえている。ネクタイがいい趣味だなと思うと、顔立ちも人をそらさぬ——つまり、ヤマトンチュだなと、英子は

すこし緊張した。

「社長さんは？」

「社長、ですか」

「つまり照屋さん」

くすん、と英子は笑った。

「何が可笑しいですか」

「だって、社長さんて呼んだことがないんです」

「どう呼ぶんです？」

「伯父さん」

「おじさん？」

田端は正直にあきれてみせた。

「母の従兄だから伯父さんです」

「なるほど……」

田端は、空いた椅子にかけて、「しかし、念のためにききますが、いちおう株式会社ですよね」

「合資会社です。合資会社伊江島海上観光」

言いながら英子は、週刊誌を抽斗ひきだしにしまいこんだ。すると机の上は、すっかり片づいて何もなくなった。それから、何か可笑しさに耐えきれないという顔のまま、田端を直視した。

「もう帰るの？」

「はい、まもなく」

「可笑しいな。社長、つまりその伯父さんですよ。会社にも家にもいない。あなたの家へ行ったりいうが、行ってみたら帰ったあとだった」

「私の家、ですか……」

英子はおどろいて、「あなたは、どなたですか」

「田端正巳といいます」

「田端？」

おおむ返しに答えて、すこし考えるところに分って、「ああ、ブローカー」

「そうです……」

田端は、すなおに白い歯をみせて笑った。「よく分りますね」

「だって、有名さあ」

一年ほど前から、島に土地ブローカーがはいりこんできた。復帰をひかえて観光開発ブームをあてこんでのことである。その一人が田端正巳だ。

「光栄だなあ」

「モーターボートも買うんですか」

「ははは……」

こんどは田端が大きな声で笑った。

「まさか。モーターボートは不動産じゃない」

「可笑しいと思ったさあ。そんなら……」

何をしに来たかと問おうとするのへ、

「英子さんは、この仕事好きですか」

「退屈さあ」

「だらうな。しかし、いまに忙しくなる」

「なぜですか」

「海洋博がきまったんです」

「どういうこと？」

「海洋博が本部半島で開催されることが、きまったのです」

英子は、あらためて窓を通して本部半島をながめた。春の海にゆったりとなだらかな緑の線がうかんでいるだけである。

「閣議で今日きまったのです。電話がありました」

英子は、われしらず口をあけて田端の顔を見た。

「閣議って、分るでしょう？」

「大臣のですか」

「そうですよ。これでもう動くことはありません。本部半島で沖縄国際海洋博覧会ということになれば、沖縄の経済はその方向へ急ピッチに動きます。伊江島もその例外ではありません。その話をするために、いま僕は来たのです」

英子は、舫^{ふか}つてある五隻のモーターボートを見た。それにしては何と退屈そうにたゆたっていることか。

「しかし……」

英子は、まだ半分しか呑みこめないでいる。「田端さんと社長が、海洋博で何をするつもりですか」

「海洋博では何もありませんよ。ただ、本部半島で海洋博開催となれば、伊江島にもおぜいの人があるのは必至だし、それにあわせて計画をたてようということです」

「ホテルを建てるんですか」

「それは勿論でしょうね」

「ほかにいろいろ、田端さんなどは計画していらっしゃるわけですか」

「いや、僕は不動産のことしか知らない。事業家が計画をたてれば、それにあわせて不動産の世話をしただけです」

「そんなら、社長に何か事業をさせようということ？」

田端は、これにじかに答えるかわりに、笑顔をみせた。英子が、多少は山だしのところがあるが、それがうまい効果をだしていて爽やかだ、と感心した。しかし、この娘を相手に正面きって事業の話をしてもはじまらない。

「あはあ、私に事業の話をしても、しかたないですよ。あら、社長が来たさあ」
勘ははやかった。そして、もうショルダー・バッグをつかんで起ちあがった。

御嶽^{うたき}の前を照屋孝信がゆっくり歩いてくる。

あつという間の選手交替であった。その間、しかし三十秒ぐらい、事務所には田端しかいない。社長と社員とは顔を見あわせて、

「帰るのか」

「田端さんがいるさあ」

これで話を通じるのも妙なことだと、田端が窓ごしに感心しているところへ、照屋はドアをあけてはいった。

「近頃は色気づいて、会社よりもデートが大事だと思っている」

「はあ。今からデートですか」

「どこでと思いますか」

「さあ、見当がつきませんなあ」

「あんたなら、どこにしますか」

「僕ですか……」

田端は、まじめに考えた。「東京なら喫茶店ですが、伊江島でなら、タッチューかモーターボート」

「こんな時間にタッチューに登れば、ハブが怖いです。モーターボートでは話ができない。伊江島でも喫茶店はありますからね」